

後漢時代の鎮墓瓶における発信者について

江 優 子

〔抄 録〕

後漢時代の鎮墓瓶に関する研究は少ないが、本稿は特にその発信者を主題にし、またこれまでになされてこなかったその地域性を問題にするものである。鎮墓瓶における「黄帝」は「天帝」の「天」に対峙して「地」を象徴する權威であり、一方の「黄神」は土地に関わる重要な神であるという結論を得た。また、鎮墓瓶の発信者の文言には確実に地域性が存在するということが、大きく分ければ「黄帝」の文言を用いる洛陽を中心とした東側の地域と、「黄神」及び「北斗」を用いる西側の地域とに分かれる傾向が判

明した。その地域性は当時の行政区画に依る可能性が高いと思われる。一定の共通した地下冥界に対する概念を有した人々が、一定の形式による鎮墓瓶を作成し墓内に副葬するという風習を共有しつつも、部分的には地域的な概念や流行を取り入れていたということであろう。

キーワード：鎮墓瓶、鎮墓文、天帝使者、黄帝、黄神

はじめに

鎮墓瓶とは、陶器の表面にいわゆる鎮墓文を記した一副葬品である。その形態は多くが瓶或いは罐状を呈し、「斗瓶」「朱書陶器」等とも称される。河南省、陝西省、山西省の黃河流域における後漢中晩期の墓から出土し、伝世の品も含めて現在までに六十四点の鎮墓瓶の銘文が

発表されている。また銘文の冒頭に紀年が記されているため、桓帝、靈帝時期に多く作製されたことがわかっている。

筆者はさきに、その銘文と、墓室内における副葬位置について論じ、鎮墓瓶が墓内に配置される際には特別な意味を持つてその場所を選択することの多いことを指摘した。⁽¹⁾殊に、死者の安寧への祈りと共に死者や災いを及ぼす邪悪な神などを恐れる鎮墓文を記した鎮墓瓶を墓門

表一 鎮墓瓶における発信者の文言

紀年	出土地	発信者	文中の文言	末尾の文言
永平三年(六〇)	陕西省咸陽市文林路	黄神使者		
永元四年(九二)	陕西省宝鸡市關鷄台	天帝	北斗□公	天帝
永建三年(一二八)	不詳	天帝		
陽嘉二年(一三三)	陕西省戶県朱家堡	天帝使者		封黄神越章之印
陽嘉四年(一三五)	陕西省西安市中華小区	天帝		
陽嘉四年(一三五)	河南省陝县劉家渠	天帝神師		
永和六年(一四一)	伝陕西省西安出土	□帝神師使者		天帝使者告
永和六年(一四一)	不詳		(天帝)	
建和元年(一四七)	陕西省長安県三里村	天帝使者		
元嘉二年(一五二)	河南省洛陽市郊区李屯郷	黄帝		
永寿二年(一五六)	伝陕西省西安出土	天帝使者		
永寿二年(一五六)	河南省洛陽市史家湾村	天帝使者	移大黄印章	黄帝呈上
建寧元年(一六八)	河南省潼関県吊橋鎮	皇帝使者		
建寧三年(一七〇)	河南省洛陽市燒溝漢墓	黄帝(青鳥)		
建寧四年(一七二)	伝陕西省西安出土	□帝		
熹平二年(一七三)	山西省同蒲路開工時出土	天帝使者	黄神生五嶽	
熹平四年(一七五)	伝陕西省西安市出土	天帝		天帝
光和二年(一七八)	伝陕西省西安出土	黄神北斗		
光和二年(一七八)	伝陕西省西安出土	天帝神師黄神章		
初平四年(一九三)	陕西省西安市和平門外雁塔路	天帝使者		
初平四年(一九三)	伝陕西省西安出土	天帝使者		
以下無紀年	陕西省宝鸡市福臨堡車駅西部	黄神北斗		
	陕西省宝鸡市福臨堡車駅西部	黄神北斗		
	陕西省鳳翔県南古城遺址南壁	天帝		
	陕西省長安県南李王村	游光地柱南紀北斗三樓七星		
	陕西省長安県三里村	北斗君		
	陕西省西安市中華小区	天帝使者		
	陕西省華陰県嶽廟郷新村	黄帝使者	□神越章	
	陕西省韓城市姚庄坡下晨鐘村	黄帝使者		天帝神葉庄鎮
	河南省雲台県張湾村	天帝(地)使者		
	河南省陝县劉家渠	天帝	(黄神越章)	
	河南省洛陽市唐寺門	天帝	天上使者	
	河南省密県後土郭村	黄帝		
	不詳	天帝使者黄神越章		
	不詳	天帝		

発信者が書かれている鎮墓瓶35点を抜粋した。(一)内は前後の剥落が激しく文中での位置が特定できないもの。

へ配置する例が多く、現世へと続く出入口である墓門に一種の結界のようなものを張り、墓を守ると同時に靈魂が墓から外へ出て行くことを防ぐという認識があったと思われること等も述べた。また河南省の墓においては墓室の隅、或いは木棺の傍らに配置される例が散見すること、こうした配置にもやはり死者を閉じ込め或いは死者を守るという認識の存在することを明らかにした。そうした作業を通して、筆者は鎮墓瓶における特徴の一つである「天帝使者」「黄神使者」などの文言に注目するようになった。

「天帝使者」と「黄神使者」は、それぞれ天帝が派遣した使者、黄神が派遣した使者を意味し、鎮墓瓶は基本的にこうした「使者」が地下冥界へ向けて発信する文書の形式をとっている。またその構成は、末尾に「如律令」の文言が見られることなどもわかるように、当時の実際の公文書を意識している。鎮墓瓶についてはこれまでに比較的多くの研究がなされてきており、発信者について言及した論考も少なくない。小論では、そうした先行研究をふまえていささか私見を述べ、さらにこれまで述べられることのなかった地域性についても考察を加えていく。

一、天帝使者 (表二)

後漢鎮墓文における発信者として最も多い文言は「天帝使者」である。例を以下に挙げる。

〔陝西省長安縣三里村漢墓出土版〕

建和元年十一月丁未朔十四日解。天帝使者、謹為加氏之家別解。：

また、「天帝神師」とする例もある。

〔河南省陝縣劉家渠漢墓一五八号墓出土版〕

陽嘉四年□戊子朔廿一戊申。天帝神師臣□謹為唐氏合衆□□…

つぎに、「天帝使者」に関する先行研究を整理しながら私見を述べてゆく。

吳榮曾氏⁽²⁾は、鎮墓文が初期道教の要素を多分に備えていることを鎮墓文の特徴的な文言を挙げて逐一考察するなかで、発信者についても言及している。氏は、一九六〇年江蘇省高郵市邵家溝漢代遺址の下層堆積から出土した、「天帝使者」の封泥と「乙巳日（死）者鬼名為天光天帝神師已知汝名、疾去三千里、汝不即去南山給□令來食汝急如律令」という鎮墓文的な呪文を記した木片⁽³⁾を挙げ、これらは方士或いは巫覡が術を施したのちに残したものであるとした。さらに後漢の方士や巫覡は悪鬼を祓う際は必ず「天帝使者」や「天帝神師」など神靈の名義を借りて天帝の「使者」や「神師」の化身や代理者としてそれらの方術を行なったと述べ、また晋南北朝時期には道教を「天師道」、道士を「天師道士」と称し、「天帝神師」が後漢末頃すでに簡略化されて「天師」と称されていたと述べた。また吳氏と同様「天帝使者」が当時の巫祝や方士の自称であるとする説については、劉昭瑞氏⁽⁴⁾が、『太平經』卷五十生物方訣の「比若人有道而称使者、神人神師也。」という記載をその根拠に挙げている。また小南一郎氏⁽⁵⁾は、河北省望都二

号墓出土の光和五年（一八二）太原太守中山劉氏買地券の銘文の一部に「…大□士、謹為劉氏之家、解除咎殃。」の「大□士」を「大方士」と考え、「天帝使者」の役目を方士的な人々が務めていたことの一つの左証となるであろう。」と述べる。

吳氏が指摘したいわゆる「天帝使者」の漢印は、江蘇省高郵市出土の一点のほかにも多数伝世または出土している。たとえば一九八七年「天帝使者」の銅印が陝西省宝鶏県陽平鎮の村民によって宝鶏県博物館に委託されている。⁽⁶⁾委託者によると、掘り出した陶罐内に五銖銭と共に入っていたといい、調査後の報告によれば、それらは長さ三メートル幅三百メートルの漢代遺址より出土したという。このほか、羅福頤『秦漢南北朝官印徵存』第五卷後漢道家印には、天津芸術博物館蔵及び北京故宮博物院蔵の「天帝使者」印がそれぞれ紹介されている。また「天帝神師」「天帝之印」等の印も存在する。⁽⁷⁾これらはみな、方士巫覡的な持ち主が、確かに天帝が派遣した使者であることを示すためのひとつの道具であったと思われる。さらにこうした印を、江蘇省高郵市邵家溝漢代遺址に残ったように何らかのまじないに用いていたのであるろう。「天帝殺鬼」「天帝殺鬼之印」の印などの存在もそれを裏付けていると言えよう。⁽⁸⁾

ところでこうした地下冥界へ発信する文書について、前漢墓より出土する「冥界へのパスポート」を県の官吏クラスが執筆していたとする山田勝芳氏の論考⁽⁹⁾は非常に興味深い。山田氏によれば、後漢時代になると、文字使用階層の拡大による官吏の文字面での役割が減少したことと、また死生観が変化して生死が分離したため地上の官吏の仲介

が不可能になったことによって、官吏によって作成された冥界への文書は見られなくなるといふ。また、鎮墓瓶は移文の形式を踏んではいるが、文章の定型化が進んでいたとみられるから、必ずしも官吏による執筆を考えなくてもよいと述べている。筆者は後漢時代の鎮墓瓶がそれほど定型化しているとは考えていないが、生と死を執拗に区別し死者や災いを及ぼす地下の邪悪な神等を遠ざけようとする、非常に呪術的で読み解くのも困難な様々な文言の多く見られることから、やはり呪術的な事柄を生業とする方士や巫覡といった人々が鎮墓瓶の製作に深く関わっていたことは間違いないと考える。

また、天帝の使者を表したという図像に関して林巳奈夫氏の研究がある。⁽¹⁰⁾ 林氏は、沂南画像石墓前室北壁における三分された壁面の中央部の、周囲に四神を配し全身武装した獸形神の画像が天帝の使者を表しているとし、「天の四方の星座を代表する四神の像と天帝使者をもつて天空を表わしたものと述べている。氏はまた、河北省石家荘市の漢墓出土の帯鉤に武装した人物の周囲に四神が配されるというデザインがなされ、また出土地不明ではあるが同様のデザイン⁽¹¹⁾の帯鉤には、帯にはめるボタンの上部に「天帝使者」の文字が付けられていると指摘した。また武装した姿に関して、山西省・同蒲路開工時に出土した鎮墓瓶を鎮墓瓶の一例として引用し、「死人のために、彼を残酷に扱ひかねない地下の世界の諸侯や縣知事を、天帝の威をかさに抑えにかからうといふのであるから、強力に武装した手強さうな姿に表象されたわけであらう」と述べる。しかし、当該鎮墓瓶において、天帝の使者の武装を示すような記載は見られない。以下、同鎮墓瓶の全文を挙げる。⁽¹²⁾

熹平二年十二月乙巳朔十六日庚申。天帝使者、告張氏之家三丘五墓、墓左、墓右、中央墓主、塚丞、塚令、主塚司令、魂門亭長、塚中游擊等。敢告、移丘丞墓伯、地下二千石、東塚侯、西塚伯、地下擊植卿、耗里伍長等。今日吉良、非用他故。但以死人張叔敬薄命蚤死、当来下埽丘墓。黃神生五嶽、主生人祿、召魂召魄、主死人籍。生人築高台、死人埽深自狸。眉須以落下為土灰。今故上復除之藥、欲令後世無有死者。上党人參九枚、欲持代生人。鉛人持代死人。黃豆瓜子、死人持給地下賦。立制牡厲辟除土咎。欲令禍殃不行。伝到、約勅地吏、勿復煩擾張氏之家。急急如律令。

ここで天帝の使者は、すでに当地に葬られている張氏の祖先たちや地下世界の官吏たちに対して、新たな死者張叔敬が地下へ下りていくことを告げている。そして張叔敬や祖先たちに対しては生死の区別を説き、様々な供物を持たせることで張叔敬および遺族の安寧を図り、地下の官吏たちに張氏の家をかき乱すことのないように命令させるのである。他の後漢時代の鎮墓瓶においても、武装を感じさせるような記載は見られない。また画像石に描かれているような獸身を表す記載もないように思われる。これは地域によって天帝使者のイメージにばらつきが生じるということであろうか。また小南氏は、この図像に関して「この神の第一の特徴は、持てる限りの武器を身に備えることによって防備を固めていることであるが、その神としての本質的な機能は、むしろこの神が世界の中央に位置していることにあると考えられる。すなわち、この神が図像として描かれるとき、多くの場合、朱雀、玄武などの四神を周囲に配して、その中央に立った姿で表され

ているのである。中央（世界の中心）は、神話学的にいえば、天と地とが結合する場所であり、その地点で天と地との交流が可能になるのである。天帝から地上や地下へ遣される使者が、世界の中央に配されて描かれるのは、むしろ当然であつたといえるであらう。」と述べている。⁽¹⁴⁾また、河南省靈宝県張湾漢墓五号墓より出土した四点のうちの二点に見られるような「天地使者」と書かれている鎮墓瓶について、「天地と表記したのは、その音が天帝に近かつたための誤記なのではなく、天と地とを結ぶ使者という意味から、そうした呼び名もあつたと考えるべきなのかも知れない。」と指摘している。

二、黄帝と黄神

「黄帝」「黄神」の文言については、黄神を黄帝の神化と見るべきか、あるいは全く異なる神と見るべきか、これまで様々な解釈がなされている。この文言を発信者とする例を以下に挙げる。

〔韓城市姚庄漢墓出土瓶〕

黄帝使者、謹為閭□□之家移殃去欲。（略）百鬼何不疾行、天帝

神藥庄鎮。若急如律令⁽¹⁵⁾

〔宝鶏市 車廠漢墓一号墓出土瓶〕

黄神北斗、主為葬者阿丘、鎮解諸咎殃：

〔咸陽市咸陽教育学院二号墓出土瓶〕

永平初三年十月九日丙申。黄神使者、□地置根。為人立先除殃去咎。利後子孫：

また、「天帝使者」と並列される例もある。

〔出土地不詳〕

天帝使者黄神越章、為天解仇、為地除殃。主為張氏家：

つぎに、「黄帝」「黄神」に関する先行研究をまとめながら私見を述べる。

王光永氏は、『文選』卷七、班固「幽通賦」に

黄神漠而靡質兮。遣識以應對。

とあり応劭の注に「黄、黄帝也。」とあることから、鎮墓瓶の銘文における「黄帝」とこの「黄神」は同一の神を指しているとした。⁽¹⁶⁾またこのほか文献に見られる「黄神」としては、『淮南子』覽冥訓に、

西老折勝、黄神嘯吟。

とあり高誘注に「黄神、黄帝之神」とみえる。「黄神」に関する文献の記載は乏しい。そのため、以上の記事をもとに単に「黄神」は「黄帝」であると研究は多い。そのなかで大淵忍爾氏は、『淮南子』の記載を引き、「黄帝の神とは五天帝としての黄帝と帝王としての黄帝が一体化したものであらうか。」と疑問を呈し、また班固「幽通賦」応劭注「黄、黄帝也。作占夢書。」については、『漢書』藝文志雜占「黄帝長柳占夢十一卷」が見えるのを指すのであらうか。」とし、「要するに知識人達に理解されている黄神は黄帝と関わるものとされるが、その素性は今一つはつきりせず、正に「邈として質なし」である。」と述べるものの、この二つの記載に検討の余地のあることを示した。⁽¹⁷⁾また、河南省孟津県出土の漢延熹四年（一六二）買地券に「黄帝告丘丞・墓伯・地下二千石（略）墓門亭長」とありまた券の裏面に「有天帝教、如律令」とあることに言及し、「黄帝は天帝の使者的なも

のに相違なく、黄神の誤記か、或いは黄帝神で、黄神と一類の神格なのであろう」と述べている。また大淵氏と一部共通するかたちで、小南氏は、黄帝はもともと斉国の皇祖として、創造主というより文化英雄的な神で思想・政治的色彩の強い存在であり、それが後世になって天地創造神の性格が加わり、今までの古代帝王としての「黄帝」とは違いがあることを意識して「黄神」と命名されたと述べる。また黄帝である黄神と、天帝使者は同一神格とは言わないまでも、天地を結ぶ存在として類似の機能をもつ神として考えられていたと結んでいる。

一方糕振西氏は、湖北省武昌出土の南齐永明三(四八五)年買地券に「黄神・后土・土皇・土祖・土管」などがあり土地神とみられる一連の神々と並記されていることから、黄神もまた土地神の一であるとしている。⁽¹⁸⁾しかし後漢時代に西安・洛陽周辺で書かれた鎮墓瓶の記載とこの記述とを全く同日に考えるのは難しいように思われる。また氏は更に、五行説において黄は中心であり古代中国において土地神は重視されていたことを指摘し、漢晋の方士は天帝と黄神などの土地神とを共に崇拝していたため、「黄神越章天帝神」という印章も作られたと述べる。そして天帝に通じる時は「天帝使者」印を、地神に通じる時は「黄神越章」⁽¹⁹⁾「黄神使者」印を佩びていたと論じている。筆者は「黄神」を単なる土地神とは考えていないが、しかし氏の考察には大いに着想を得た。

「天帝の使者」と自ら名乗ることには「天帝」という絶対的な權威を借りることに意義がある。これは「黄帝の使者」という文言においても同様であり、「黄帝」の權威を借りるものであることは明白であ

る。とすれば「天帝」が天の主宰であることと対峙するかたちで、「黄帝」には五行思想の黄から「地」のイメージを重ね合わせたのではないだろうか。

また大淵氏は、アスターナ三〇三号墓出土の高昌和平元年(五五一)の鎮墓文に類した文書⁽²⁰⁾を挙げ、「中に「黄天帝神云々」の語が見える。黄神の詳文或は黄神と同じものを指すのではないかと思われるが、これは明らかに天神である。」と述べている。このアスターナ出土の文書は劉氏も取り上げており、「神人が斧と鉞(まさかり)を持った画像」が描かれており、下に「黄」の文字が書かれている。漢永寿二年鎮墓瓶には「大黄印章」という文言が見られる。これらの黄とは「黄帝」であり、黄帝の画像を随葬することで辟邪驅鬼の作用になった⁽²¹⁾とする。また坂出祥伸氏は「天帝」と推測される神像が描かれており、下に「黄」の文字が書かれている。さらに下方の呪言の冒頭に「天帝神符」とあるので「黄」は黄帝の略で黄帝は天帝である⁽²²⁾としている。このアスターナの文書は、墓主である趙令達のために災いをおよぼす悪鬼を退治し墓主を守るという一種の鎮墓文のようである。黄紙に朱書で、四行にわたり「天帝神□注殺百／子死鬼□後必道鬼／不得来近護令達／若□上急、如律令也」とある。その上部に、頭に三角の帽子のようなものを被り、右手に三つ又の矛を持ち、左手に何か長細い棒のような物を持った人物が描かれている。さらに人物の足元には「黄」の字が大書してある。この「黄」は何を意味するのであろうか。朱で書かれた文中には「黄帝」「黄神」の文言は見られない。

ここで一つ想起されるのが、伝洛陽出土の後漢光和七年九月券に見

える「上至天、下至黄」の文言である。これは土地売買の際の土地の四至を示した文言であり、河北省望都二号漢墓出土の漢光和五年二月券には「上至倉天、下至黄泉」とある。この文言について仁井田陞氏は、「買主の取得する権利の範囲が買地の上下にまで及ぶことを指示したものでありローマ人が土地の所有権の及ぶ範囲を「天まで」また「地の底まで」といったのに類するといえよう。」とのべる。よって、この人物が文書中にある「天帝神□」であるとすれば、その下に書かれた「黄」字は、「天帝神□」自身が地下冥界に下りて来て墓主を守ることを示したと考えられなくもない。

もう一つ、「黄」は「黄帝」であるとすれば、劉氏が根拠としている河南省洛陽史家湾出土永寿二（一五六）年瓶を考察してみよう。

永寿二年五月□□□□直天帝使者旦□□□之家、填寒暑、□□□移大黄印章、迫校四時五行（略）黄帝呈下、急□舟□□神玄武其物主者、慈石池□建□⁽²⁴⁾

文字の欠落があり意味のわかりにくい部分も多いが、天帝の使者が大黄印章（の封泥のある文書？）を様々な神々に対して移文し、黄帝が判決を下して邪鬼の類を駆逐するという。この鎮墓瓶は、地下官吏を介して死者と生者の安寧を命じるような他の鎮墓瓶とは明らかに一線を画している。蔡運章氏は江蘇省高郵市邵家溝の木簡に言及し、この鎮墓瓶について「効鬼文と称するべきであろう。」と述べている。⁽²⁵⁾ 大黃印章という印や封泥もやはり当時の方士的な人々が用いたものであろうか。天帝の使者が「天帝使者」の印ではなく「大黃印章」を用いている点が、この鎮墓瓶において最も注目すべき点であろう。やはり

この場合「大黃印章」の「黄」は黄帝を意味する可能性が高い。しかしここで黄帝がすなわち天帝であるとか天帝の使者であるとするのは少し早急であろう。天帝の使者が「大黃印章」を用い「黄帝」が邪鬼を駆逐することには「天」「地」両方の権威という概念がはたらいたと考えることも可能である。黄帝の使者が天帝の神薬を用いて邪鬼を制圧するという陝西省韓城市出土鎮墓瓶、また河南省平孟津出土延熹四年（一六二）鐘仲游妻鎮墓券「黄帝告丘丞墓伯：有天帝教如律令」にも同様のことが言えよう。アスターナの文書も「黄」を「黄帝」ととらえれば、そのように考えることもできる。これらの鎮墓文における天帝と「黄帝」とはそれぞれが「天」と「地」を象徴するものであり、どちらも人に害をもたらすあらゆるものを駆逐するに十分な絶対的権威をもつと認識されていたことは間違いないだろう。劉氏は「後漢鎮墓文中や印章には「黄帝使者」も「天帝使者」もあるが、当時の人にとっては黄帝も天帝も同じことであつたのではないか。しかし「天帝越章」の例は存在しないことを考えると、辟邪驅鬼という効能は同じでもこの二者にはいくらかの区別があつたと思われる。」と述べているが、それがまさにこのことなのではないだろうか。

また黄神に関しては、大淵氏は陝西省宝鸡市出土瓶の発信者「黄神北斗」に関して、山西省同蒲路出土瓶の「黄神生五嶽、主生人祿召魂召魄主死人籍」とあるのを引いて「黄神は土徳の神であるから、五嶽を生む、或いは主どるとされたものと解されるが、人の年命を主どるという北斗と似た働きをするものであり、さればこそ北斗と併称されるのであろう。然らば天神の一つと見るべきものと思う。」という。

一方小南氏は『太平御覧』卷七十九皇王部黄帝軒轅氏条『河図握拒』に、黄帝名軒、北斗黃神之精。母地祇之女附宝。之郊野、大電繞斗枢星、耀感附宝、生軒、胸文曰黄帝子。

(黄帝の名は軒、北斗黄神の精である。母である地祇の娘附宝が郊野へ行き、大電が斗枢星に絡まり、耀が附宝に感じ、軒を生むと、胸に文が記されており黄帝子とあった。)

という記載を指摘し、地祇の娘が北斗の輝きに感応したことは「黄帝が天上の北斗と大地とを結合させる機能を持つことの理由付けとなっていたのだろう」と述べ、また「北斗黄神」の精とあるので、黄帝は黄神であり天帝使者的なものであるという見解の証としている。⁽²⁶⁾しかしここで記された「北斗黄神」とは、おそらく北斗を中央、黄神を土

徳の意として表わすことで、黄帝の性質を表現しようとしたものなのではないだろうか。陕西省宝鸡市出土の三点の鎮墓瓶には「黄神北斗」と記され、死者のために災いを除くとされているが、この「黄神北斗」と『太平御覧』の記載とは、異なる意識のもとに記されたと思われる。この三点の鎮墓瓶において黄神と北斗とを連名させた理由は、黄神が土地に関わる神の中でも特別な神で、北斗が人の寿命を支配する神であるという点にあるのである。なぜなら、地(すなわち墓や地下世界)と寿命とは鎮墓瓶の銘文において最も重要な主題であるからである。これらを連名させることで土に関わる咎や災いをより確実に除かんとしたと考えるべきではないだろうか。陕西省長安県南李王村出土鎮墓瓶では「游光地柱南組北斗櫓七星」が被葬者の罪過を解除することが記され、陕西省長安県三里村出土鎮墓瓶には「北斗君」が様々な死を

つかさどることが記されている。

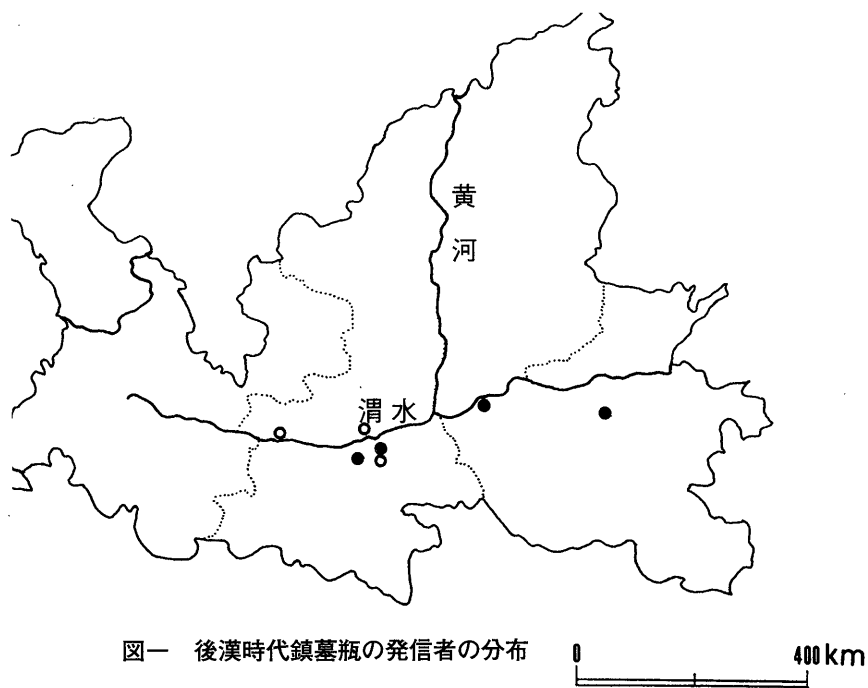
三、発信者の地域性について(表一、図一、二)

発信者として最も多く用いられる文言は「天帝使者(天帝神師も含む)」であり十点、「天帝」六点、「天帝使者黄神越章(天帝神師黄神章も含む)」二点、「黄神使者」一点、「黄神北斗」三点、「黄帝」三点、「黄帝使者(皇帝使者も含む)」二点、⁽²⁷⁾「游光地柱南組北斗三櫓七星」一点、「北斗君」一点であった。このうち出土土地が明らかである鎮墓瓶について、発信者の文言の分布を検討した結果、その地域性が顕著に現われた。

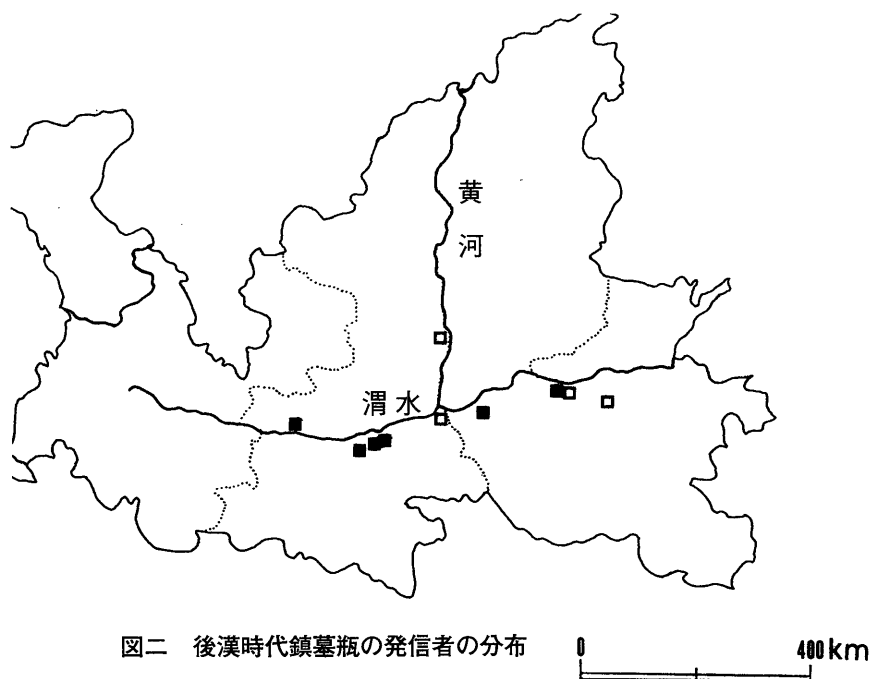
まず、「天帝使者」「天帝」の文言は発信者として最も多く用いられると同時に、鎮墓瓶の出土する全地域に涉って見られる。

一方、「黄帝」が発信者の鎮墓瓶は、河南省洛陽市及び密県出土の鎮墓瓶にしか見られない。すなわち、河南省洛陽市出土元嘉二年(一五二)、同建寧三年(一七〇)、河南省密県出土(無紀年。後漢晚期?)⁽²⁸⁾の鎮墓瓶である。また洛陽市永寿二年(一五六)の鎮墓瓶では、発信者は「天帝使者」であるが文中に「黄帝」の文言が見られた。また河南省孟津県出土の延熹四年(一六一)鍾仲游妻鎮墓券にも発信者として「黄帝」の文言が見られる。このことから、鎮墓瓶に「黄帝」の文言を用いることは、洛陽周辺地域における後漢後期から晩期の鎮墓瓶(含鎮墓券)の特徴的要素である可能性が高いと言えよう。

また、「黄帝使者(皇帝使者)」を発信者とする銘文は陕西省潼関県



黄神使者・黄神北斗・北斗 ○
黄神越章（発信者ではない） ●



天帝使者・天帝 ■
黄帝使者・黄帝 □

出土の建寧元年(一六八)及び陝西省韓城市出土(無紀年。獻帝期?)⁽²⁹⁾の鎮墓瓶に見られる。

一方、陝西省咸陽市出土の永平三年(六〇)鎮墓瓶においては「黃神使者」を発信者としている。また、山西省で同蒲路開工時に出土した熹平二年(一七三)の銘文では発信者は「天帝使者」であるが文中に「黃神」の文言が見られた。

また陝西省宝鶏市で出土した四点の鎮墓瓶のうち、剥落が激しく発信者が読み取れない一点を除いた三点の鎮墓瓶において、全てが「黃神北斗」を発信者とする。言い換えれば、「黃神北斗」を発信者とする鎮墓瓶は、全てが陝西省宝鶏市で出土したものであった。全三点のうち、一点は光和年間(一七八―一八三)の紀年が記され、他の二点は後漢後期と推定される墓から出土しており、これらはほぼ同時期に作製されたと言える。このことから黃神と北斗が連なつた「黃神北斗」という文言は、現在の陝西省宝鶏市周辺における後漢後期の鎮墓瓶の特徴的要素であつた可能性が高い。

また、「游光地柱南組北斗三櫓七星」及び「北斗君」を発信者とする鎮墓瓶(無紀年)は陝西省長安県からのみ出土している。

「黃神越章」を発信者とする鎮墓瓶は、伝陝西省西安出土光和二年(二七九)瓶に「天帝神師黃神章」として記されている。また、陝西省華陰県出土瓶、河南省陝県出土瓶は「黃神越章」の前後の文章の剥落がひどく、発信者であるか否か判別することができない。陝西省戸県出土陽嘉二年(一三三)瓶は発信者は「天帝使者」であるが文末に「封黃神越章之印」とある。

以上の作業を通して、次に示す二つの新たな事実を明らかにすることができた。一つは「天帝使者」「天帝」の文言が発信者として地域に涉つて使用されていること。もう一つは、「天帝使者」「天帝」以外の発信者の文言には確実に地域性が存在するというのである。さらにこの地域性は、大きく分ければ「黃帝」の文言を用いる洛陽を中心とした東側の地域と、「黃神」及び「北斗」を用いる西側の地域とに分かれる傾向があると言えるのである。

後漢時代の鎮墓瓶が出土する地点を後漢の行政区画に照らすと、全て司隸校尉部内におさまる。さらにそれぞれの文言の分布と逐一照らし合わせると、「黃神北斗」が発信者である鎮墓瓶が出土した宝鶏市五里廟一号漢墓及び宝鶏市福臨堡車駅西部に位置する鏝車廠漢墓一号墓は等しく右扶風の西部に位置することがわかつた。また「黃神使者」が発信者の鎮墓瓶が出土した陝西省咸陽市文林路咸陽教育学院二号墓は京兆尹の西部、ほぼ右扶風との境に位置していた。一方、「黃帝」が発信者である鎮墓瓶が出土した河南省洛陽市郊区李屯郷一号墓、河南省洛陽燒溝漢墓一〇三七号墓及び密県後土郭一号墓、また文中に「黃帝」の文言があつた鎮墓瓶が出土した河南省洛陽史家湾後漢墓の一連の墳墓は等しく河南尹に属することが判明した。ただ「黃帝使者」が発信者である鎮墓瓶が出土した陝西省韓城市姚庄坡下農鐘村の漢墓は、左馮翊東部に位置している。

以上のことから、後漢時代の鎮墓瓶における発信者の文言に見える地域性は当時の行政区画に依る部分が大きいということが言えるだろう。発信者の文言が地域によって異なってくるということは、すなわ

ち、一定の共通した地下冥界に対する概念を有した人々が、一定の形式による鎮墓瓶を作成し墓内に副葬するという風習を共有しつつも、部分的には地域的な概念や流行などを取り入れていたということなのであろう。

以上、鎮墓瓶における発信者について個々に述べてきたが、私見をまとめると、鎮墓瓶における「黄帝」は、いわゆる黄帝とまったく同じではなく、あくまで「天帝」の「天」に対峙して「地」を象徴する権威であり、一方の「黄神」は土地に関わる重要な神であったと思われる。まだまだ資料が少ないこともあり「黄帝」と「黄神」との関わりは筆者は現在判断しかねるが、「黄神北斗」「黄神使者」は西側地域の特徴的要素であり、「黄神越章」はどちらの地域でも用いられ、「黄帝」は東側地域の特徴的要素であることを考えると、あるいは別個の概念から生まれた神格なのかも知れない。発信者として「天帝使者黄神越章」とある鎮墓瓶に関しては、さらに研究を進めたうえで私見を述べたい。民間信仰というものは様々な要素が複雑に絡み合い、また歳月や地域性を経て様々に変化していくのが常である。「黄神」「黄帝」もまたそうしたもののなのかもしれない。

〔注〕

- (1) 江優子「漢墓出土の鎮墓瓶について―銘文と墓内配置に見える死生観」『鷹陵史学』第二十九号 二〇〇三年。
(2) 呉栄曾「鎮墓文中所見の東漢道巫関係」『文物』一九八一年第三期。

- (3) (現代語訳) 乙巳の日に死んだ者の靈魂、名は天光。天帝神師はすでに汝の名を知っており、すばやく三千里へと遠ざける。汝はただちに南山へと去らなければ、給□来て食せしめる。汝、急ぎ律令のごとく施行せよ。木片には北斗七星の図や呪符等も記されていた。報告によればこの遺跡は後漢末期に属するという。楊錫璋「江蘇省高郵邵家溝漢代遺址の清理」『考古』一九六〇年第十期。

- (4) 劉氏は『太平経』の記載と鎮墓文とを比較して、様々な文言について解釈を行なっている。劉昭瑞「《太平経》与考古発現の東漢鎮墓文」『世界宗教研究』一九九二年第四期。

- (5) 小南一郎「漢代の祖靈觀念」『東方学報』第六六冊、一九九四年。

- (6) 閻宏斌「宝鶏県出土“天帝使者”銅印」『文博』一九九一年第三期。

- (7) 「天帝神師」銅印・北京故宫博物館藏(『秦漢南北朝官印徵存』第三卷)、「天帝之印」(封泥・『封泥考略』卷七)

- (8) 「天帝殺鬼」(封泥・山東寿光県出土、呉式芬等『封泥考略』卷七)、「天帝殺鬼之印」(銅印・天津芸術博物館藏と浙江省博物館藏の二点、羅福頤『秦漢南北朝官印徵存』第五卷)

- (9) 山田勝芳「境界の官吏―中国古代における冥界への仲介者―」『歴史』第八十三輯 東北史学会 一九九四年。

- (10) 林巳奈夫「漢代の神々」臨川書店一九八九年「漢代鬼神の世界」一三〇頁。

- (11) 王海波「石家莊市東崗頭村発現漢墓」『考古』一九六五年二期。

- (12) 劉体智『小校経閣金文拓本』。

- (13) 現代語訳は前掲注(1)の論文を参照のこと。

- (14) 小南氏一九九四年前掲論文。

- (15) (現代語訳) 黄帝の使者が謹んで閭□□之家のために殃を移し、去るようによ請する。(略) 百鬼はすぐさま去り、天帝の神薬で圧鎮する。急ぎ律令のごとく施行せよ。

- とあり、「黄帝使者」が災いを除き、天帝の神業で邪鬼を制圧するという。
- (16) 王光永「宝鶏市漢墓發現光和与永元年間朱書陶器」『文物』一九八一年第三期。

- (17) 大淵忍爾「初期の道教」創文社一九九一年、九五～九七頁。

- (18) 樺振西「曹氏朱書罐考釈」『考古与文物』一九八二年第二期。

- (19) 黄神越章の印は、陽嘉二年(一三三)鎮墓瓶に「何以為信。神業厭填、封黄神越章之印。」などとあり、人間に害をもたらす神や獣から身を守るものとして広く認識されていた印章であることがすでに明らかにされている。方詩銘氏は、「黄巾起義先驅与巫及原始道教的關係——兼論“黄巾”与“黄神越章”」(『歴史研究』一九九三年第三期)においていわゆる黄神越章は天帝の使者であり、天帝に次ぐ権力をもつと考えられている。原始道教の神であると述べた。氏はさらに黄巾軍の名称のもととなった「中黄太乙」がすなわち「黄神」であり「黄神越章」であるとも論じている。これに対して劉昭瑞氏は「論“黄神越章”」(『歴史研究』一九九六年第一期)において、黄神越章とは早期道教において用いられた言葉で、黄神つまり黄帝の行なう方術のことであると反論した。「越章」の「越」は『後漢書』方術列伝に見える禁呪巫術「越方」の「越」であり「章」は符呪という意味であると氏は論じる。また『後漢書』卷八靈帝紀に、中平元年張角が「黄天」と自称したとあるがこの黄天は黄帝であると論じている。さらに氏は、文献中に類似した宗教造反者が「黄帝」と自称する例が多く見られるが、こうした非常下で「黄帝」を名乗ることには、大衆に対して自分が大業を図りその他の神霊を抑え信徒の忠誠とさらなる多くの人々の信仰を得んとしたものであろうと推測している。黄神越章の方術は、黄巾の乱とともに流行し、その衰亡とともに消え、結果黄神はただの土の神になったと述べる。本稿において筆者はこの方氏と劉氏の説に深く立ち入らないが、「黄神越章天帝神之印」とい

う複合型の印章が数点存在することや、また鎮墓瓶の発信者として「天帝使者黄神越章」のように記される意味の説明がなされていないため、「黄神越章」に関してはまだ検討の余地がありそうである。

- (20) 『吐魯番出土文書』第二冊 文物出版社 一九八一年 三三頁。

- (21) 劉氏一九九六年前掲論文。

- (22) 「冥界の道教的性格——“急急如律令”をめぐる——」『東洋史研究』第六十二卷第一号 二〇〇三年。

- (23) 蔡運章「東漢永寿二年鎮墓瓶陶文考略」『考古』一九八九年第七期。

- (24) (現代語訳) 永寿二年五月□□□□直ちに天帝の使者が旦□□□之家(のために)、寒暑を鎮め、□□□□大黃印章をまわし文し、四時五行をおびやかし(略)黄帝が判決を下し、急□舟□□神玄武などの主なる者、慈石池□建□

- (25) 蔡氏一九八九年前掲論文。ここでは「黄帝」であるものの、林氏の「武装する天帝の使者」のイメージに近いように思われる。

- (26) 小南一郎氏前掲論文。

- (27) 「黄」と「皇」を音通とする。

- (28) 趙世鋼、歐正文「密県後土郭漢画像石墓發掘報告」『華夏考古』一九八七年第二期。

- (29) 賈表明「韓城市漢墓出土閭氏朱書陶瓶考釈」『東南文化』一九九三年第三期によれば、他の出土品や鎮墓瓶の風格から献帝期(一八九・一二〇)と推測されている。

(こ) ゆうこ

文学研究科東洋史学専攻博士後期課程
(指導・杉本 憲司 教授)

二〇〇三年十月十五日受理